

二〇一四年
十月二十五日(土)▼
十一月二十二日(土)

岡本光博 ポップアップ

キュレーション 工藤健志
会場 EITOEIKO

考が深まれば、そして自らの生活を愛していれば、他者に対して短絡的、威圧的な言動なんて軽々しくとれるはずないんだから。たったそれだけのことでいいのに、今の時代はまったく逆で、どんな立場の人間も、都合の悪いところには目をつむって、美辞麗句ばかりを並べたて、義を振りかざして意見の異なる人々を徹底的に叩く。決して良いことではないですよ。右も左も結局は同じ穴の貉、ファシズムとは「右」の謂ではないのだ。

近年の「文化」は分かりやすいもの、安易に答えを出しちゃうものが多いし、あるいは「こけおとし」や「おためごかし」のアートもそこらじゅうに転がっているが、いずれもその赚しつぷりは滑稽ですらある。それはそれで、「感動話」や「人生訓」ばかりが受けちゃう、表層的な現代社会の特徴を写すものだと解釈できそうだけど、でもなんだかねえ……。できることなら、アートは個人個人の思考を深めるきっかけとなる装置であって欲しいし、同時に様々な抑圧から解放されるための処方箋のような役割を果たすものであって欲しい。決して、人を導くための手段ではない、と個人的には思っている。



ST#329 JMP8-3
2014 変形キャンバスにシルクスクリーン
1240×690×40mm

岡本光博・マックロポップ

ごく個人的な感想として言わせてもらえば、東日本大震災は社会における「偽善」と「取り繕い」、そしてその裏にひそむ「営利」を加速させただけなのではないかと最近つくづく思う。極端な話、戦争をしている国に武器を売る「死の商人」と、被災を利用し「社会貢献」という美名のもとに商売を行う人間の違いを、鈍感な僕は全く理解できないのだ。もちろん被災地を想う人のほとんどは純粋な動機で動いているのだろう(と信じた)。けれど、そうした個々の思いなど巨大な資本主義の渦にいつもあっけなく飲み込まれてしまう。「悲劇」は確実に「金」を生む。ゆえに被災地に集る現状は社会の素直な反応とも言えるし、ある意味で人間という存在のたくましさを表すものでもあるのだが、それでも「悲劇」にかかわろうとするひとりひとりの「品格」は問われるべきだろう。アートに携わる人間の一部もまた(アートもひとつの経済活動であるがゆえ仕方ないことだけども)自ら率先してその渦中に飛び込んでいくが、できることなら、悲劇を利用するアーティストに未来など語ってほしくないし、安易な社会批判や、特権的な立場から悲劇を俯瞰する態度だけは慎んでもらいたいと切に願う。どちらかと言えば、悲劇を前にすると、両手をあげておろおろし、ただ呆然とする人間の方を僕は信じたい。

そうそう、来年は敗戦から七〇年ということで、またいろいろと戦後日本の「総括(笑)」がかまびすしくなっていくんでしょね。ちなみに今年は第一次世界大戦の開戦から一〇〇周年なんだけど、あまり話題にならないのはなぜだろう。「戦勝国」だから？ 前の前の戦争だから？ でも、人類が経験したはじめての近代的な大規模戦争という点において、社会の

と、前置きがちよつと長くなつてしまつたけど、岡本光博の作品はその意味で「現代」という時代性と真つ向から対立する。「誠実」ではないし、「重く」ないし、むしろ見る者を「小馬鹿」にしているようだし、あるいは「おふざけ」にしか見えないからだ。これでは美術業界内で過小評価されるのも仕方ないこと。なぜなら、評価とは言い換えれば価値づけ、権威化の行為であるから。そうした権威や力があるいは常識という名の世論に対する徹底的な懐疑が岡本の活動の根底にはある。

岡本の制作態度にはその活動の初期から全くブレがない。自らの経験や思考のあり方を立脚点とし、そこから浮かび上がる世界認識と、社会への疑問を直截に表現する。どこまでも今の時代に生きるひとりの日本人(京都人)という視点から作品は生み出される。他者やその集合体である社会にコミットするのではなく、外界の様々な事象を自らの思考のフィルターをとおして岡本光博という個の表現へと昇華させる。海外での作品制作においてもその立場は貫かれるが(ゆえに現地の人々には全く理解できない作品も平気で制作されたりもする)、それはどこまでも自己を他者と「相対化」する試みと言えよう。この一貫した相対化のまなざしこそが岡本作品を特徴づけるものであり、そこから「わたし」と「あなた」、「日本」と「世界」、「今」と「昔」、そして事象の「おもて」と「裏」といった関係性が多様な切り口で問いつられていく。そこに明確な答えは存在しない。相対化の中で生じる意味や認識の「ズレ」が提示されるのみである。

近年、ほんらい文化を保護するための著作権という制度を「利権」にのみ利用し、文化が文化を矮小化させている現代の状況を暗示させるかのような作品で話題となった岡本であるが、社会的なモチーフをぐつと自らに引き寄せ、そのモチーフが内包する多

システムや人間という存在の認識を大きく変えたのはむしろ第一次世界大戦だと思うんだけど……。

もつと言えば、第二次世界大戦における「敗戦」とその責任を曖昧にしてきたツケが今の日本が抱える問題のすべての根源ではないし、むしろ戦後日本の物質的な繁栄を謳歌してきた世代に、いまさら「自己反省」なんて言われてもねえ。まあそれは「知識人」を自認するためのお作法だったりもするので、あまり真剣に受け取る必要もないだろう(笑)とにかく今の日本の状況を憂いて(みせて)社会や他者を批判する人たちに限って意外と視野狭窄だったりするし、どうせ視野が狭いのであれば、まずは自分自身



ST#328
ポリ袋/Recycle Kills The Copyright 2
2014 ビーボくんぬいぐるみ、がま口

の生活を見つめ直してほしいと思つたりもする。

自然災害は恐ろしい。原発も恐い。戦争もよくない(のだろう)。たぶんそれは当たり前のこと。誰だって命の危険にさらされたくはないし、でも戦争は繰り返して続いてきたし、今も世界各地で紛争は頻発しているし、理想とされる社会の追究のために多くの人が犠牲になつてきた歴史の事実もある。そう、世の中とは本質的に不条理であり非合理的なものなのだ。大事なことはそれにいかに適応しながら生きていくかということ。言い換えれば、歴史と世界に対しては、できるだけ慎ましい態度で臨むこと。知識や思

義的な諸相を(あるときは整理し、またあるときは混沌のまま)で再構成して作品化する手法は岡本の作品すべてに共通する「根幹」と言える。相対化による「ズレ」は、見る者それぞれに驚き、笑い、怒りなどの様々な感情を誘発するが、そこでどまるところではなく、一歩踏み込んで、自らの感情や解釈が何に由来するのかを考えてみるのが、岡本作品を鑑賞することの醍醐味なのである。これまでの認識とは異なる、新しい視点がそこから見いだせよう。「ハロ

岡本光博展「マックロポップ」
キュレーション 工藤健志(青森県立美術館学芸員)
2014年10月25日(土)~11月22日(土)
アーティストトーク 岡本光博×工藤健志
10月25日(土)17時より 入場無料
※そのままオープニングパーティーになります。
eitoeiko 東京都新宿区矢来町32-2
開廊12:00~19:00 日月祝休廊
03-6873-3830 <http://eitoeiko.com>
連絡先 ei@eitoeiko.com(担当:癸生川)

デイ」や「アイロニー」が許容されなくなり、「ユーモア」や「軽み」が批評の有効な手段として認知されなくなった現代社会において、岡本の作品は時代の閉塞性を穿つ視覚の快楽と、古来より連綿と続いてきたそうした知的な遊びがもたらす思考の快楽に気づかせてくれる。

例えば、「悲劇」は裏返すと喜劇に転化する。それを不謹慎と指摘するのはたやすいが、悲劇を消費し(裏面にしつつ)

（表面からつづく）

て満足する人間が多いこともまた確かであろう。「真実」だってひとつではなく、解釈如何で変わるもの。ひとりの人間でさえ感情も思考も決して安定しないように、その無形の意識の集合体である社会をそう簡単に把握できるはずもないし、それは解釈した途端にまた別の解釈を生み出す。むしろ表面的には均質化の進む世界が、未だ多義的、重層的なものであることを岡本作品は示しており、見る者は世界との接し方をそこから考察することができる。そもそも文化とは知の集積体であり、それは引用の複雑な織物であるがゆえに、様々な感情を引きおこし、限りなく意味が生成されていくもの。その上澄みを掬い取って、きれいな事にするのはたやすい。そんな純粹な白さを求めるのでなく、さらに表層しか映し出さない白い鏡に自らを投影するのではなく、混沌がひそむどろどろとした暗黒の中からそれぞれの光を見出していくこと。岡本の作品は、我々の意識が何に支配されているかを明らかにし、それぞれの出自と生活に根ざした思考と価値を形成するきっかけを与えてくれる。白い偽善よりも黒の偽悪、暗黒はすべてを飲み込むだけでなく、時として我々に「応えて」くれる。本展を「マックロポップ」と名付けた所以である。

工藤健志(青森県立美術館学芸員)



R#230
mpc品川1301ほ1305
2014　1/18ミニカー<Benz>,LEDシステム



FG#546
Illegal Alien 2
2010　ラリッサ(合成皮革)にアクリル

岡本光博(1968年京都市生まれ)

1994　滋賀大学大学院教育学科卒業

1994～96　ニューヨークのアート・スチューデント・リーグに学ぶ

1997～1999　CCA北九州リサーチプログラムに参加

2001～2004　ドイツのレジデンスを中心に、インド、スペイン等で活動

2004～2006　沖縄と台湾を拠点に活動

2007～　京都に拠点を移動

2012～　アーティスト・ラン・ギャラリー KUNST ARZTを京都に開廊

主な展覧会

美少女の美術史　青森県立美術館・静岡県立美術館・島根県立美術館　2014／岐阜大垣ビエン

ナーレ　2013／福岡現代美術クロニクル　福岡市美術館・福岡県立美術館　2013／ファッション

綺譚　神戸ファッション美術館　2010／Strange World　Blackburn Museum & Art Gallery　英

国　2009／White Cottage　高雄　2008／Just Love Me　The Royal T　ロサンゼルス

2008／Thermocline of Art - Asian New Waves　ZKM現代美術館　カールスルーエ　2007

ほか多数

OKAMOTO Mitsuhiro: Makkuro Pop October 25 - November 22, 2014 curated by Takeshi Kudo, curator of Aomori Museum of Art

eitoeiko is pleased to announce a solo exhibition ‘Makkuro Pop’ by OKAMOTO Mitsuhiro(b.1968). The exhibition is curated by Takeshi Kudo, a curator of Aomori Museum of Art. Makkuro means entirely black in Japanese. The word is also used with the meaning of the worst, and the baddest.

about *OKAMOTO Mitsuhiro: Makkuro Pop* by the curator:

As my own personal impressions, the Tohoku earthquake evoked the acceleration of the hypocrisy. There is a lot of money making behind the reconstruction. I can’t distinguish the merchant of death of war and the merchant improving the victims under the name of ‘Contribution to society’. Of course, almost all the people working in the disaster regions have pure motives, I believe. But a huge whirlpool of the capitalism swallows such individual feelings easily. Definitely a tragedy creates money. Therefore the current situation in that area is a natural reflection of a society. It indicates the strength of the human life in a sense. Still the dignity of each person concerned with tragedy should be called into question. Some people engaged in art jump into the maelstrom proactively (because art is also one of the economic activities), but I do not want an artist utilizing tragedy to talk about the futures. I do not want him or her to do easy criticism to a society. I hope the artist should be careful not to look at the tragedy from a special privilege-like viewpoint. If anything, I believe rather the people those who are flustered in front of the tragedy.

By the way, it will be the 70th anniversary of the end of the war in the next year. So a lot of discussions about postwar may occur again and again. But why the postwar talk about the WWI has not so done in Japan today, in spite of its 100 years? Because of Japan got a victory? Because the one before last? I think the WWI was the first experience of the modern war. The WWI changed our social system and the recognition of the existence of us much, rather than the WWII. Both of the defeat of the WWII and the reasoning which obscures the war responsibility of state high command are not the cause of the problem in Japan today. In my opinion, could the generation who enjoyed material prosperity of postwar Japan do self-questioning? It is etiquette for intellectuals, so I have not to be serious. Anyway, people those who worry about Japan criticize the others. But it looks like that they have a narrowed view of the world. They should only take care of themselves.

I am afraid of a natural disaster as same as an accident of a nuclear plant. I think war is bad, it maybe. It is ordinary feeling. Nobody wants his or her life to be in danger. The war happens many times, even now it goes on. History says that there were a lot of sacrifices for an ideal world. So, the world is an irrational thing. The most important thing is how we adapt ourselves. In the other words, we should be careful about history and the world as possible. Acquiring knowledge and thought, and loving our life make us not taking the coercive and simplistic behavior to others. If only we could do, it would go well. Today, in opposite, people in some positions beat the others that have different opinions, with ignoring troublesome things, or using flights of rhetoric, or committing wrongs in the name of justice. That’s too bad. The right or the left, either will lead to the same in the end. Fascism is not only a meaning of the right.

The current culture seeks a simple, easy thing. There are a lot of dazzling art, self-ingratiating art. Such a cool-style art looks screamingly funny. It could be interpreted as a reflection of the surface of the world that consumes a lot of heartwarming stories and life lessons. But I want the art to be the device which is a chance to deepen an individual thought. And at the same time the art should be a kind of prescription that makes free from any pressures. Art is never means to lead a person, I personally think.

These preliminaries have gone on too long. In that sense, the work of OKAMOTO Mitsuhiro is opposed to the time which is characterized as the present. It is not an honest, it has not a weight. It rather makes a fool of a viewer, or it seems to be being ridiculous. This is why his work is underestimated in the art scene. Making a value is, in the other words, being recognized by an authority. And his activities are based on doubting it. OKAMOTO is an artist thoroughly distrusts about a right, a power and a public opinion called a common sense.

OKAMOTO’s attitude to making his art is consistent. He directly throws a question in a society. The question is formed by his own experience, his thoughts and recognition of the world as an Kyoto-jin (Japanese who was born and lives in Kyoto). And not to be committed to the others and a society, it is always crystallized with his personal filters in his brain. The process is strictly executed in the overseas, so sometimes OKAMOTO made the work which the people on the spot could never understand. This attempt is considered as the perfect relativization. From his work, we can find out the relativization of ‘I’ and ‘You’, Japan and the world, the present and the past, and the front and the back of the subject. The question has no correct answer. The artist just indicates the gap of the meaning and the recognition which is occurred by the relativization.

In recent years, OKAMOTO is known for his work about the problem of the copyright that does not protect a culture but uses for a concession. It suggests the situation like that culture dwarfing culture. Hence the reconstruction of a motif in a society is his body of the work even if the meanings were arranged, or were thrown away in the chaos. The gap by the relativization causes various feelings such as the surprise, laughter and the anger. And there is a something new viewpoint in his work. The most important thing for tasting OKAMOTO’s work deeply is thinking about where the various feelings come from. Today parody and irony are not permitted, and also humor and wit are not recognized as effective means of the critics. The work of OKAMOTO reminds us the pleasure of thought which is given from an intellectual play as well as the visual pleasure to open the mind from a closed society.

That is not a bland-new way. It continues from ancient. For example, a tragedy can transform into a comedy. It is easy to point out that is imprudent, but it is a fact that there is a person those who consumes a tragedy for his or her own feeling of satisfaction. Truth is not one thing, it changes easily by interpretation. Even one human being can have a lot of feelings, so it is impossible to understand a whole society, which is accumulating a mass of the unconscious minds. When it was interpreted, the different interpretation will be brought soon. I rather say the work of OKAMOTO indicates the world is still multilayered of the meanings, as though it seems that the world today advances homogenized, at least the surface of it. From his work, viewers can think about how to take care of the world.

Culture is an accumulating body of the intellect, and it is a complicated textile of the quotation. It generates both of the feelings and its meanings limitlessly. It is easy to make a beautiful thing by the surface of it. OKAMOTO does not want such a pure white, does not want to reflect us in a mirror of our surface. The artist aims to indicate a light in the darkness of the chaos. OKAMOTO reveals how our consciousness is controlled, and he gives us a hint about how to make a value which is rooted by each living.

Pretending to be bad is better than white hypocrisy. That is the reason why I titled this exhibition ‘Makkuro Pop’.

Takeshi Kudo
curator, Aomori Museum of Art

eitoeiko
32-2 Yaraicho, Shinjuku-ku, Tokyo 162-0805, Japan
+81 (0)3.6873.3830　http://eitoeiko.com　open 12PM-7PM　closed on Sunday, Monday and National Holidays
contact: ei@eitoeiko.com